

国際文化学部鹿毛敏夫教授の

「島津勝久～府内沖浜で没した当主～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2017年1月7日(土)

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

九州の戦国史の中で、薩摩の島津氏と豊後の大友氏、鎌倉時代以来、九州の守護というところ、九州を二分するであった両家が対立する関係になったのは、16世紀後半の大名とのイメージがあります。半の天正年間(1570年代)からです。

確かに、天正6(1578)年に両者は日向の高城(宮崎県木城町)・耳川で激しく戦い、8年後の天正14年末に優勢に立った島津軍が豊後に侵攻し、大友氏の本拠の府内(大分市)を焼き打ちした事実は、日本の戦国合戦史としてよく語られる通りです。



鹿児島市福昌寺跡にある島津勝久の墓

それだけでなく、戦国時

代の府内の様子を描いた古図を見ると、港のあった沖浜と吉崎の間(現大分市住吉町辺り)に、勝久の墓とする石塔が描かれているのが、なぜ豊後の府内にあったのでしょうか。

勝久は文龜3(1503)

歳の永正16(1519)年に当主となります。

しかしながら、経験の浅い勝久の政権基盤は弱く、薩摩家・伊作家・豊州家などに分かれる島津氏諸家の勢力争いを抑えることができず、やがて家臣団の離反も招き、その政情は混乱を極めます。

早くも24歳の大永6(1526)年に家督を養子の貴久に譲り、自身は大隅や日向地方の諸氏を味方に一時勢力を取り戻すものの、最終的に母親の実家である豊後大友氏の下を頼ることになったのです。

天正元(1573)年、勝久は豊後府内の沖浜で没します。享年は71歳。薩摩で政権を握ったのは、10代から20代の一時期のみで、むしろ人生の過半は豊後で生きたこととなります。

沖浜にあった石塔のその後については確認できませんが、鹿児島市にある島津氏の菩提寺福昌寺跡の墓地には、父の忠昌、兄の忠治・忠隆と並んで、勝久の墓が立てられています。

年に忠昌の三男として生まれました。当時の島津宗家はまだ一族や諸豪族の統率が取れない状況で、永正5(1508)年に忠昌は没し、跡を継いだ2人の兄(忠治と忠隆)もともに20代で夭折します。勝久は17

島津勝久

府内沖浜で没した当主